

目黒寄生虫館月報

昭和35年1月10日発行・毎月1回10日発行

第11号

昭和35年1月

虫が好かぬ

釘本久春

—目黒寄生虫館万才ノ—

われわれ普通の人間で、「虫」なる存在に好意を持つ人間は、あまり多くはないようである。というよりは、めったにないのではあるまいか。

だいいち、われわれがふだん話している話のなかにも、その傾向が、よく出ている。

—ムシの好かないおひとだ。

—ハラの子がおさまらぬ。

—ムシケラにも及ばぬやつだ。

ところで、「虫」は、なにもわれわれに、危害を加えたり、不快感を与えたりばかり、しているのではない。

日本の秋の夜は、現代もなお、鈴虫松虫の鳴く声によって、しみじみと「あわれ」が深い。

また、少年の日のころを、思い出してもみよ。豪快なカブト虫くんたちの勇戦力闘を、扇動し観戦することによって、どんなに新鮮な興味を感じる事ができたか。胸に覚えのある人も多かろう。

それであるのに、普通、「虫は、ムシが好かない」などと感じているのが、われわれ人間である。「虫」でもない病気にまで、「水虫」などと名をつけたり、「泣き虫」、「弱虫」などと、人間相互の間の、人格無視の悪口にまで、「虫」を引きあいに出す勝手さである。

まったく、もしわれわれが「虫」であるならば「一寸の虫にも五分の魂」と言いたくなるであろう。

しかし、人間の中にも、「虫」に対する、こうしたいわれなき嫌悪や軽蔑を、反省し、慎んだ賢人がいたからなのであろう。「虫」の行動を観察し、その純一無難なる没頭ぶりに感動して、「虫」のそのような生き方に比すべき純粋な行為を事とする人間に対して、そうした賢人たちは、含蓄ある評言を残しているのである。

—たて食う虫も好き好き。

このことわざの中では、「虫」と人間との間の間隔は、すくない。すくなくとも、「虫」は、人間と他様な存在ではない。

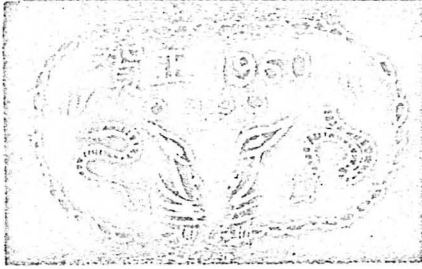
おそらくわれわれが、「虫」に対する不遜にして非科学的な意識からみずからを解放する道は、このことわざについて沈思することから開けて来るのであろう。

そういえば、目黒寄生虫館の仕事、寄生虫の収集や研究に没頭しておられる博士やそのお仲間の仕事も、この「たて食う虫」の系列に入る仕事と言えそうである。

が、その仕事のおかげで、「寄生虫」は、いや一般に「虫」たちも、人間のまともな努力の対象に昇格されているわけだ。

この「寄生虫館」が出来たことによって、「虫」たちは、ようやく、人間らしい人間を発見できたと思っているかも知れない。

(大日本育英会理事、本館評議員)



本年もよろしく申し上げます

亀谷 了 鶴田政四郎
 木原 緑 野々部春登
 鈴木俊邦 町田昌昭

齋藤公衆衛生院長来館

12月8日齋藤院長来訪，当館出版物英文版発行につき種々好意ある助言を与えられた。

大島智夫博士来信

当館の出版計画「日本寄生虫学の進歩」について同博士からビーバー教授に話をされたところ，大変喜ばれ「ここを訪れた日本の寄生虫学者に私は何回も助言したのだ。日本には大変重要な寄生虫学の業績があるのに，それが日本語であるため我々は知らずに見のがしてしまうのだから，せめて何年に一回でも良いから英文の業績紹介をだしてもらいたいと。それがここに篤志家の手によりまさに予期していた以上の立派な形で現れようとしているのは喜びに堪えない。来年の末にはこれを手に入れることが出来るだろう，その日を待っている」との事でした。

また執筆者の大半は既に名を知っておられたが，あとの人についても，これはどういう人で何をしているのかと一つ一つ説明を要求されました。云々

中川正幸博士夫妻来館

12月5日山梨県公衆衛生課長中川正幸博士 夫妻が来訪された。(故中川幸庵博士令息)

文献寄贈

北里研究所目黒支所添川正夫氏から……Revue Suisse De Zoologie 外5編

東京農工大農学部久米清治教授から……犬糸状虫の研究外30篇

久大寄生虫岡部浩洋教授から……佐賀県下の寄生虫病外25篇

岡山大薬理山崎英正教授から……Pharmacy of Anthelmintics 外23篇

宮城県衛生研究所湯田和二郎氏から……宮城県における顎口虫の分布調査

予研岡見吉郎氏から……Dalsi Poznatty o Helminthofaune v Ptaka Ceskoslovenska Bohumil Rysa vy

台北市衛生院長王洛博士から……近来自由中国公共衛生的進展外1篇

三重大水産学部椎野季雄教授から……Copepods Parasitic on Japanese Fishes 10 Redescription of Three Species of Caligus 外11編

東京医大細菌大黒勇教授から……細菌学領域への電子顕微鏡の応用外39篇

下関市小月町岡宮佳氏から……季節的消長曲線からながめた蚊の繁殖外6篇

新大医動物学大鶴正満教授から……東洋毛様線虫の病害性外16篇

山口医大病理細川修治教授から……脳肺吸虫症の臨床並びに病理組織像について外41篇

長崎大薬理中沢与四郎教授から……蛔虫駆虫薬について外6篇

山梨県医学研究所大田秀浄博士から……杉山仲子の碑写真5葉

寄生虫学会へ……「田熊清一郎氏の集められ寄生虫の標本について」2部

尾崎佳正博士森下薫教授福井玉夫教授へ……同上

大阪医大内科岩田繁雄教授から……鉤虫症の治療外39篇

以上本月小計256篇

標本寄贈

黒部保健所長中川秀幸氏から……故中川幸庵博士の実験された肥大吸虫の各发育過程の標本14点，ホマロガステル1点，ミクロトレマ1点，貝類11点(独仏産を含む)

九大医学部宮崎一郎教授へ……田熊清一郎氏標本顎口虫1隻

生物学同好会

福井理博の動物分類学が終ったので，その総括の意味で……というわけで，本月は，国立科学博物館長岡田要博士から「動物の歩んできた道」という特別講演をおききした。12月12日。次回から杉靖三郎博士の生理学。

ON SOME ACANTHOCEPHALA FOUND IN MARINE FISHES (5)

MIDORI KIHARA

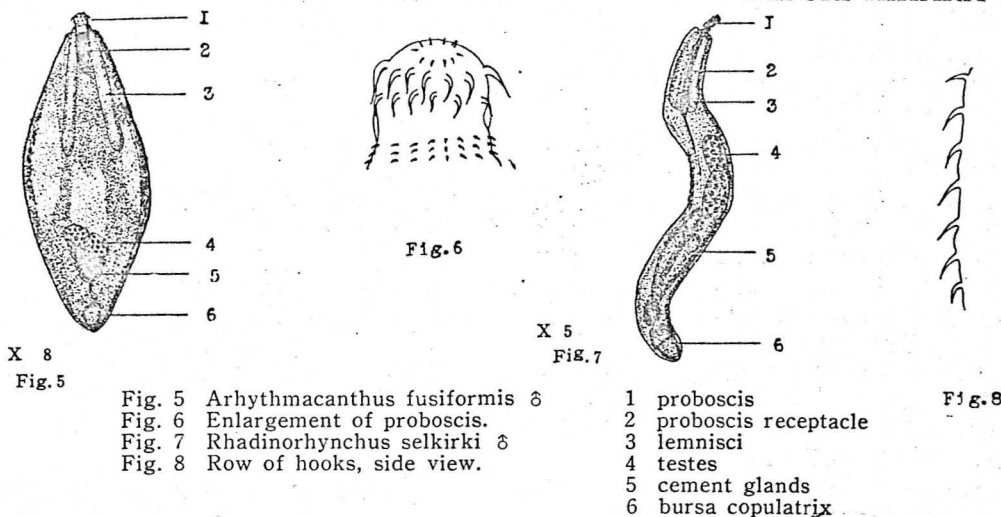


Fig. 5 *Arhythmacanthus fusiformis* ♂
 Fig. 6 Enlargement of proboscis.
 Fig. 7 *Rhadinorhynchus selkirki* ♂
 Fig. 8 Row of hooks, side view.

1 proboscis
 2 proboscis receptacle
 3 lemnisci
 4 testes
 5 cement glands
 6 bursa copulatrix

LITERATURE

Yamaguti, S. 1953 Studies on the Helminth Fauna of Japan. Part 8, Acanthocephala, I, Jap. Jour. Zool. Vol. 6, No. 2.
 Yamaguti, S. 1939 Studies on the Helminth Fauna of Japan. Part 29, Acanthocephala, II, Ibid. Vol. 8, No. 3.
 Fukui, T. and Morisita, T. 1936 Three New Species of Acanthocephala from Japan. (A Preliminary Report) Zool. Mag. (Japan), Vol. 48, Nos. 8-10.
 Fukui, T. and Morisita, T. 1937 Studies on the Japanese Acanthocephala. Zikken Igaku-Zasshi, Vol. 21, No. 1.
 Yasaka, K. 1958 Two Species of *Rhadinorhynchus* (Acanthocephala) from Fishes Which were Found in Kagoshima Prefecture. Kagoshima-Daigaku Igaku Zasshi, Vol. 10, No. 3.

目黒寄生虫館建設記録⑧

〔承前〕この建物は、寄生虫研究所として、一般人の啓蒙と専門家の研究資料と場を提供する目的で計画されたものである。元来この種の施設は、欧米各国では普及されており、各国の権威者と親交のあるK博士はわが国にも、是非国際的なこの種の施設を作りたいという念願のもとに、自費をもって建てられたものである。従って設計を依頼された私達は、K博士の熱意に答えるべく、ローコストで出来るだけ立派なものにしようと努力し、その結果、木造建物に近い費用で出来上がった。

敷地は北側、東側が通路に面した角地で、西側境界は隣地が高い。

設計に当り、要求されたことは、各室の必要なスペースの提示があったほか、将来3階建に増築する予定であることと、現在の2階の間仕切を変更することが出来るようにということのみで、一切を任せられた。

次にこの建物の特長を列挙すると

1. 構造計画に当っては、西側境界線まで崖が迫っている関係上、1階壁面を後退せしめ、独立基礎の偏心避け、同時に2階床を張出して経済的梁間とした。
 2. 付帯設備に当っては、1~2階のコア部を同一平面に重ね、ダクトを通じて各種配管及び通気を集約した。
 3. 開口部は出来る範囲整理し、スチールサッシュの箇数を少くした。
 4. 外壁はコンクリート打放しとしたが外装費用の節減と、完全なコンクリート打ということに主眼を置き、普通の型枠を細心の注意で1~2階に共用した。
 5. 内部主要仕切には軽量コンクリートブロックの両面を水磨きしてそのままの仕上げとした。(富田衛)
- 以上の序文を添えて設計に使用した青写真の詳細が紹介されている。

次にその建築の過程を述べよう。(亀谷)

ニューオルリンズ通信④ 大島智夫

(感恩祭に思った事)

今日はサンクスギビングの休日です。朝教会で特別の礼拝と説教と朝食の集りがある筈であり出席を勧誘されていたのだ。「Dr. Oshima 今度の木曜の朝は wonderful sermon があるから是非きてくれ」と長老教会の幹事らしい人の熱心なすすめにもかかわらず私は今日は動物実験の大事な予定があったので大学にしました。するとビーバー教授はやはり来ておられ既に教室で誰かと熱心に研究上の討議をされておられる声が聞えていた。「He works like a beaver」この言葉はビーバー教授のために作られたのだらうというのはこの大学の誰しもが云うところです。彼には休日は念頭に無いのです。私は一まわり動物を見て昨日の実験の結果を確め部屋に戻るとビーバー教授が入ってこられた。

「Dr. Oshima 実験はうまくいってるか」そこで色々細い技術上の点について質問し懇切な御意見を伺っているうちに私は急に気分が悪くなってムカムカと嘔気を催してきました。さて今朝ドラッグストアで飯んだオレンジジュースが少し舌をさすような味だったあれのせいだなと思うと気配を察した教授は「君は気分が悪いな。どうしたのだ」「それは腐敗したジュースの食中毒だ。まもなく頭痛と下痢が始まる、これはいかんすぐ君のベッドに戻りたまえ」と云うが早いか上衣を着私をかかえるようにつれて御自分の車にのせて下宿まで送って下さった。「熱いものは安全だが冷いものは危険だ、よくブドウ球菌の汚染による食中毒が起る、君はすぐジンジャー又はセブソップを出来るだけ飲み安静にして頭痛が始まったらアスピリンでも飲むのだ」と車の中でこれからの症状、手当を実に正確に教えて下さった。

「ランドレデイはいるか、いたら君の状態が悪くなったら連絡すべき所を知らせておく」生憎休日で皆ではらって誰れもない。「君はすぐベッドに入り給え少し待っていなさい」と姿を消されたかと思うとしばらくして半ダoinsのセブソップ(サイダーのようなもの)をかかえて戻ってこられた。「嘔吐したらあとこれで水分の補給をするのだ、では大事にしたまえ」と出てゆかれ自動車の音が遠のいて気がついて見ると電話の横には私の事について連絡すべき方法と連絡先をかいたメモとセブソップの箱には小さい怪ぬきが付添えてあった。これも明かに多分彼は怪ぬきをもってないだろうと別に求められたものであり、事実私はもっていなかった。幸まもなく激しい嘔吐を催した後安静を保っているうちに症状は軽快し大過なきを得セブソップを飲みほして夜にはすっかり快復しました。

教会の朝拝に出席していればそんな腐ったオレンジジュースを飲まずにすんだらうと人は云うかもしれま

せん。しかし私は教会堂に坐って人の心のうわべをなですぎるような説教と握手を経験するより今日のビーバー教授の暖き救急の処置にどれ程深い感動を経験したかわかりません。

学問と人間はそれぞれ独立した価値体系をもっていますが、しかし我々の乏しい概念や言葉の表現できぬ深い所でまことの Truth Seeking Mind は道徳的といつてよいか人格的といつてよいかビューリタンのある Gesinnung, ethos を必要としているのでないだろうか。すぐれた学問的能力と暖き人格とが彼において偶然に一致したとは考えられないのであります。

(公衆衛生院, 医博)

短 信

12. 3. ……木原東京医歯大加納教授訪問同定ハエ標本賞受

12. 5. ……週刊読売(12. 13日号)やあこにちほ欄に館長との対談掲載

12. 6. ……館長代々木に戸祭夫人(中川幸庵先生夫人姉君)訪問, 新竹時代のお話をきく。

12. 8. ……医事日報竹田一雄氏来訪中川幸庵先生寄贈の標本撮影

12. 10. ……目黒区広報(12. 10#127)行事のこよみ欄に当館特別展示「蛭虫のいたづら」紹介記事掲載

12. 11. ……木原上野科学社ヘトビ, フクロウの内臓貰受のため出役

12. 14. ……林業試験場浅川分室宇田川竜男氏来訪

12. 15. ……寄生虫(11. 25#97)に館長執筆「中川幸庵博士御逝去を悼む」掲載

12. 16. ……館長小宮博士を訪問出版につき打合せの結果下記通り決定

a. 鈴木了可博士に小宮博士の代理として編集実務をお世話願うこと

b. 整備のついた原稿から印刷にかかること

12. 17. ……木原上野科学社へ「ワ=」の内臓貰受に出向く

12. 17. ……下目黒だより(12. 10)に館長執筆「カーの幸庵」中川博士の業績掲載

12. 18. ……館長ザタイムスにむし談義連載

12. 19. ……館長例年の通り本日午後時からつくし幼稚園児母親達に寄生虫の話をする

12. 19. ……先般来区内幼幼稚園のうち手近の数ヶ所を選び園児の母親, 保母さん達の協力を求め蛭虫の実態検査を行いこれの完全駆除について徹底的な調査を行っている。

12. 19. ……医事日報(12. 17号)に「生涯かけた肺ジストマ研究」と題し中川幸庵先生の業績紹介記事がある(資料当館提供)尚同時に「目黒寄生虫館を独力で完成」と当館の成りたちおよび館長苦心の跡などを伝えている。

12. 19. ……岡本正豊氏来館先般中川正幸氏から寄贈を受けた貝類11点の同定をして貰う。